

■ 得意 VS. 苦手 ■

「この生徒のように、得意科目と不得意科目がある場合、指導は強みを伸ばすべきか、それとも弱みの克服に力点を置くべきか?」。昨日の進路検討会で質問が出た。意見は、概ね前者がいいだろうということだった。現実には、苦手科目もなく全教科で得点が揃う生徒は稀である。強みがあるのであれば、それをまず活かしていくのがよいという考えだ。

私もそう思う。得意教科は好きな教科であることが多い。好きならば、努力を続けられる。努力が実れば、自信もつく。自信がつくことで、次のステップへと進んでいける。好循環はこうして生まれる。

でも、待てよ。不得意科目はその逆で、負のスパイラルに陥っているのではないか。嫌いだから努力を避ける。しないから結果が出ない。そして、自信をなくす。これを断ち切るにはどうすればいいのだろうか。

スノーボード・ハーフパイプの平野歩夢は平昌オリンピックでダブルコーク 1440 を2度決めて、王者ショーン・ホワイトを追い詰めた。しかし、ホワイトは最終滑走で同じ技を繰り返し、得点で上回る。2大会連続の銀メダル。だが、歴然だった差はほんの僅かになった。成長は明らかだった。

大会後、ラジオ番組でインタビューに答えていた。「前回のソチ大会でホワイトに敗れてから、どのような対策を取ってきたのですか?」「毎日、やりたくないことをやるようにしました」「やりたくないこと?」「例えば、物を片付けるとか」「それはどんな効果があるのですか?」「練習でも、意識しないとどうしても得意なことばかりしてしまう。フロントサイド、バックサイドどちらで踏み切るか、どちらへ回転するかなど。苦手を克服するためです」。

大学は、入学後のことを考えて受験生に入試科目を提示し、身につけているべき学力があるかを試験で判定する。大学の都合なのだから、進学したい大学の受験科目が受験生の得意科目だけなんてことは、滅多にない。だとしたら、受験生は得意を伸ばしつつも苦手の克服に努めなければならない。

得意科目で得られた好循環の自信を不得意科目でも活かさないだろうか。「やりたくないことをやる」意識で取り組んでいけば、いずれきっと成果が出るだろう。それが自信となって、次の努力へつないでいければいい。誰だってやってみる価値はある。世界の頂点を目指す天才でさえ苦手克服に4年間も取り組んでいたのだから。